Maruoka News
丸岡新聞
2018年（平成30年）
12月17日　月曜日

丸美新聞社
第2018I217号
LIN YICHEN　LIU JUNYAN
CHEN CHIAHSUN　PIAO JIENI

日本最古の現存天守閣を持つ丸岡城が見下ろす丸岡は、穏やかでのんびりとした空気が流れる城下町だ。自然も多く新緑や紅葉など、四季を通じて愉しめるのも魅力の一つ。

丸岡城の美

丸岡城は現存する天守の中最も古い建築であり、また日本一短い手紙「一筆啓上」もきいたことあった。周りの来た人から「小さいけど、均整のとれた古風で、随分きれいだ」といわれた。私たちは「どうして小さいながら、そんなにきれい？」という疑問を持って、丸岡城天守の魅力を見に行った。

石垣の上にそびえる丸岡城
（CHENさん撮影）

天守建造の魅力

まずは外観である。丸岡城の外観は上層望楼を形成して通し柱がなく、一層は二階三階を支える支台をなし、屋根は二重で内部は三階となっている。このようなに富んだ望楼式天守は後の時代の層塔式天守と比較すると、いかに城郭建築の初期のものであるかがうかがえる。また、屋根が全部石瓦で吹かれているのが全国にも稀な特徴となっている。

丸岡城は出入口から直接入るという「独立天守」になっている。石垣は加工してない自然の石を積んだ野面積みである。丸岡城の場合は河原石を使っている。野面積みは水掛がよく、排水力も強く、また上からの圧力に強いといわれている。石段を上って天守の中に入る。まずは一階の六本の太い柱目に入った。係り人の話によるとその六本の柱は天守のすべての重さを支えて、その重さは約80トン以上と言われた。聞いたら私たち随分びっくりした。

六本の柱
（PIAOさん撮影）

そして、私たち急な階段を利用して、二階の南北に作られた出部屋をみった。部屋の窓から外がよく見渡せるようになっている。そこから外を眺めると、景色もきれいだ。再び急な段階を上り、最上階の三階を上った。三階にあり、四方向きの大きな窓からは丸岡城に浄化を見渡すことができる。戦乱の時代、作戦を練るうえでは好都合であったに違いないと思う。

急な階段を登り綱の助けをかりながら上がる
（LINさん撮影）

江戸時代につくられた城は、城主の権威を示すため、大きく立派で多層式のものが目立つが、丸岡城内は戦国時代の雰囲気。豪華さや優美さより、いたる所にある敵に対する備えの方が目を引くと思う。

丸岡城の石段を登っているPIAOさん、LIUさん、CHENさん（LINさん撮影）

伝説「お静の慰霊碑」

天守の階段の前のところ、「お静の慰霊碑」が建ている。丸岡城を築城する際、天守台の石垣が何度も崩れて工事が進行しなかったため、人柱を立てることとなった。

「お静の慰霊碑」
（LIUさん撮影）

城下に住む貧しい片目の未亡人「お静」は、息子を士分に取り立てる事を条件に人柱となる事を申し出た。（士分：武士の身分）その願いは受け入れられ、お静は人柱となって土中に埋められ、天守の工事は無事完了した。

しかし、柴田勝豊はほどなく移封となり、息子を士分にする約束は果たされなかった。それを怨んだお静の霊が大蛇となって暴れ回ったという。毎年4月に堀の藻を刈る頃に丸岡城は大雨に見舞われ、人々はそれをお静の涙雨と呼んだ。現在城内にはお静の慰霊碑が残っている。その伝説のおかげで、丸岡城もさらに神秘感が溢れるようになった。

丸岡城を国宝にしよう！

日本全国に12ある現存天守のうち最古ともいわれる（諸説あり）丸岡城はまだ日本人にもよく知られてない。ただ、それが歴史によると柴田勝豊による築城とされている。廃城令により天守閣以外全て解体され、一部の建造物が移築され現存している。残った天主は1948年の福井地震により倒壊。その廃材を使い再建されている。

今、これが理由で国宝に指定されず現在に至っている。国宝に指定する運動があるが、実現が難しいだそうだ。そこに丸岡城天守を国宝にする市民の会という組織があって丸岡城を国宝に指定する活動をいろいろしている。丸岡城天守を国宝にする市民の会によると坂井市は、丸岡城天守を有し、現存する12天守の中でも最も古く歴史的価値があり、市民の宝だ。一般社団法人丸岡城天守を国宝にする市民の会は、国宝化運動を通して丸岡城の価値を高め、その魅力を多くの皆さまに伝えていくこと、丸岡城周辺のまちづくりを推進し、丸岡城および魅力ある丸岡地区を次世代につないでいくことを目指して取り組んでいる。

様々な活動が実を結び、丸岡城に訪れる人の数は少しずつ増えていく。

しかし、大人数を受け入れる体制ができていないというのも町の現状だ。たくさんの人たちが存分に楽しめる受け皿を作るには、地元の人が丸岡城の価値を再認識することが必要だと丸岡城天守を国宝にする市民の会の人が述べた。

丸岡城天守を国宝にする市民の会

一筆啓上 日本一短い手紙

再び手紙の美を思い出そう

一筆啓上といえば、日本一短い手紙「一筆啓上　火の用心　お仙泣かすな　馬肥やせ」だ。実はこれ、ある戦国武将が戦場から、妻へ送った手紙の文面なのだ。とても短い文章だが、4つのセンテンスだけで必用な事がきちんと要約されていて、しかも相手を思いやる気持ちも込められている。

その意味とは「家康の家臣、本多作左衛門重次が長篠の戦いの際陣中より妻に送った手紙だ。『一筆啓上』とあることによって、妻を尊重している、火の扱いに気をつけよ、お仙（嫡男・仙千代）を大切にせよ、馬の手入れを頼む（戦国時代は馬がとても貴重だった）」短い文章に要点が網羅されている。今回私たちは一筆啓上を訪ねてその美を感じようとした。

そして、一筆啓上賞は日本で一番古い丸岡城に日本一短い手紙文があることを全国に知ってもらうとともに、活字やメールでは伝わらない本物の手紙文化の復権を目指すという目的で、全国初の手紙のコンクールとして平成五年（1993）に始まった。

始めとして第一回「日本一短い『母』への手紙」は、旧郵政省の後援も受け、海外十八ケ国を含む世界各地から三二、二三六通の応募があった。第二回からは、旧住友財閥のルーツが丸岡にあることから住友グループ広報委員会の支援も始まった。

一筆啓上賞毎回テーマを換えて、今年で第26回目のテーマは「先生」だ。その26回のうちに、4回ほどは英語で募集し、アジアからブラジル、イギリス、カナダまで募集したことあるそうだ。一筆啓上館では往年受賞した作品をただ陳列するのではなく、心に響かせ、心に沁みいるよう趣向を凝らした展示で、みなさまのお越しをお待ちしている。

日本一短い手紙の館にある一筆啓上碑（LINさん撮影）

印象に残った手紙を紹介している武曽素行館長（LINさん撮影）

「桔梗が、ポンと音をたてて咲きました。日傘をさした母さんを、思い出しました。」
谷本栄治　65歳　京都府

一筆啓上 日本一短い手紙の館 武曽素行館長に聞きました

文字は人の心を映しだす！

今まで見た手紙の中で印象に残ったのは何かを武曽素行館長に聞いた。「桔梗が静かに咲いて、日傘をさしてる母親を思い出した。」武曽素行館長はすぐ私たちに1993年第一回の一番いい手紙を紹介してくれた。【聞き手・PIAOさん】

武曽素行館長がこの手紙を選んだ理由は、男の子に対して母親は最初の女性だ。そして、すごく存在感があって、つまり憧れな女性だ。この手紙は、今は病気の状態だけど、昔は元気で輝いた母親への想い、その気持ちを表現したと私たちに教えてくれた。外国人の私たちにとって、その感情はよく理解しにくいと思うが、短い手紙の美しさを感じられた。やはり自分で書いた文字が活字やメールより感情があると思う。汚くても大丈夫だ。自分で書いたものは訴えるものはある。

また、丸岡出身の武曽素行館長に丸岡城に関してどう思うかを聞いた。【聞き手・LINさん】丸岡の町おこしは二つだと言った。一つは日本一短い手紙、もう一つは現存する最古の天守閣、丸岡城。他のお城は大きいから、中にはエレベーターとかがある。その一方、丸岡城は小さいお城だから、現代的な施設がなくて、江戸時代当時の姿で今も立っている。したがって、丸岡城はもう丸岡の人々にとって、日常風景の一つとしている。

「丸岡城がない丸岡は、想像できない」

私たちは丸岡城を国宝になるについて、丸岡文化財団の丸岡城管理事務所の副所長岡崎義和さんに聞いた。丸岡城は価値がある宝物だが、町の人々にとっては、毎日見てるから、当たり前の日常になってしまってる。それを国宝にするという活動で、地域住民はこれは大事なものだと注目して欲しい。

丸岡城があったこそお客さんがたくさん来てくれる。実際に丸岡城がなかったら丸岡に誰も来ないと思うから、これが建てることがとてもありがたい。その感謝の気持ちは忘れてはいけない。丸岡城は宝物。皆に大事にしよう。あるのが当たり前すぎて、丸岡城がなかったら、人はここに来てくれないから、これを当たり前にしないようにしたい思ってる。